

Scroll.in

Oct 31, 2021

## スーダンのクーデターは東アフリカ地域を危険にさらしている

Sudan's coup has put regional security at risk. It's time for the world to act

Anne L Bartlett

---

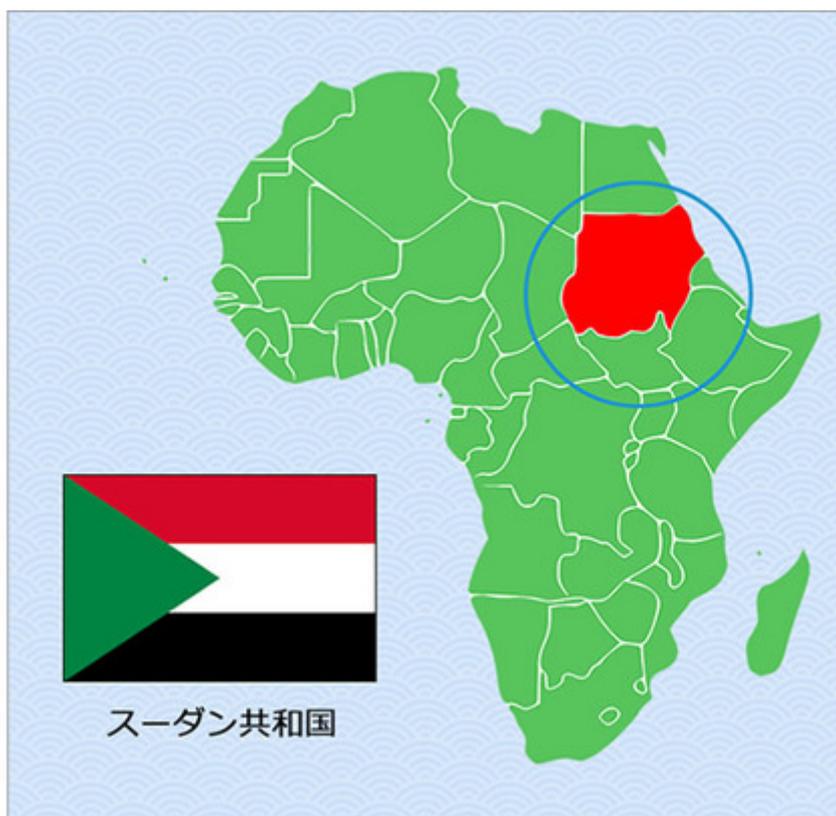
### スーダン 軍事クーデターに至る経過

スーダンのクーデターはおなじみのパターンに従っている。短い期間の民主主義が突然終わり、腐臭を放つ権威主義的な独裁に帰っていく。

ただし、今回はその代償がかつてないほど高くなっている。スーダン本土よりさらに広い地域と東アフリカ地域の安全も危険にさらされている。危険で相容れない利益が解き放たれるだけでなく、国をバラバラにしてしまいかねない緊張が生じている。

2019年、オマル・アル・バシールの国民会議党政権が崩壊した。それは30年間の権威主義的支配を終わらせた。しかし、それはまた、この期間の諸勢力間の力関係が複雑化したことも意味する。その変化は注意深く管理する必要があった。

たしかに平和と正義も危機に瀕しているが、いまもっとも危険なのは国の統一性そのものである。



### スーダンの国家内で対立する諸勢力

スーダン社会は、イスラム強硬派、国軍、政党と多数の政治グループ、そして武装民兵に分かれていた。それらはすべて、「我こそスーダンの利益を代表している」と主張した。

バシル政権に代わり登場した暫定政府は、能力を超える試練を課せられた。

金融危機のどん底にある国家財政を管理するだけでなく、国家権力の分割協定まで受け入れざるを得なくなった。その結果、政権発足後 23 ヶ月で破産した。

クーデターにより権力を握った軍は、2023 年に選挙が行われるまでの 18 ヶ月間統治を続け、その後民政移管する予定となっている。

暫定政権が解消されたということは、相争う国内党派や組織が権力の空白状態の中に解き放たれたという恐ろしい事態を意味する。諸党派はみな、自分の権益を守ることに関心を集中させて

いる。それらはスーダンの国境をはるかに超えて広がっており、世界中のいろいろな紛争とつながっている。

## イスラム過激派とスーダン

スーダンのイスラム教運動には、バシールの国民会議党の元メンバーが含まれている。しかしそれだけではない。国民会議党には、故ハッサン・アル・トゥラビの系統を継ぐ過激派が含まれている。

トゥラビはスーダンのイスラム原理派のイデオログであり組織者でもある。その勢力は 1983 年以来スーダンに浸透しており、スーダンの国策を左右してきた。

彼らは、1991 年から 1996 年にかけてオサマ・ビン・ラーディンを全面支援してきた。スーダンの過激派のもとで、ビン・ラーディンはスーダン国内にアルカイダの基地と実力部隊を建設した

トゥラビは、1998 年の大使館爆破事件の責任者であるエジプトのイスラム・ジハード団とも関わり、ヒズボラ、パレスチナ解放機構、その他多数の組織と繋がっている。

スーダンのイスラム主義者は、カタールとトルコの同盟によって支援されてきた。そして、少なくとも今回の革命までは、イランおよびサウジアラビア、そしてアラブ首長国連邦などの湾岸諸国と付かず離れずの関係が続けてきた。

イスラム主義者の多くは、今回の革命後に投獄されたり、隠れたりしてきた。そして今度は、クーデターを主導した「自決評議会」軍人グループによってだまし討ちにあった。

## 軍事クーデターの指導者

「自決評議会」を支えている軍内実力者は国軍のアブデル・ファッタ・アル・ブルハン将軍 (Abdel Fattah al-Burhan)、そして実行役の迅速支援部隊隊長モハメド・ハムダン・「ヘメディ」・ダゴロ (Mohamed Hamdan "Hemedti" Dagolo) のふたりである。

この「評議会派」の二人は、政治的にはプラグマチックであり、ともに血塗られた武闘派である。彼らはスーダンの支配をめぐる分裂の危険に悩まされている。

アル・ブルハンはダルフールでの大量虐殺の原因となった軍の立役者と見られている。

ヘメディはダルフールの焦土作戦の最前線にたち中心的役割をになった。ダルフールのジェベルアメールでの違法な金採掘事業にも関わっている。また 2019 年 6 月 3 日におきた「ハルツームの虐殺」の指揮官でもある。



自決評議会議長のブルハン将軍

近年、このグループはエジプト、サウジアラビア、アラブ首長国連邦からの支援を受けている。その少なからぬ理由は、ヘメディがサウジアラビアに依頼されて、イエメンのフーシと戦うために「迅速支援部隊」を派遣したためだ。

### 軍の力の拠りどころ

国軍内には軍事産業公社や al-Junaid などの多数の持ち株会社がある。それらは規制されていない金の採掘、建設、石油、航空産業に関わり、他国との武器取引や海外の傭兵収入を通じて得られる違法な収入源を確保している。

収入の多くは政府の財源を迂回して海外の彼らの個人口座に入る。

この収入は、政府が軍事部門を攻撃しようと図ったとき、それを財政的に不可能にする。また秘密資金は、彼らの利益を支援するために、あらゆる場面で活用される。

たとえばハルツームで「レンタルの群衆」を組織する。そして文民政府を攻撃し弱体化させたり、自分たちの要求を代弁させたりする。

## 文民政府の失敗の原因

このような状況を考えると、文民政府は不可能な課題に直面し、自壊の道をたどったと考えざるを得ない。彼らは、軍閥やその国外の支持者を経済的に打ち負かすことができなかった。

スーダンが重債務国として、財政状態がきわめて悪い状態にある。税収は低く、軍の収入にはアクセスできず、先進国の債務救済はほとんど望めない。

いまスーダンの市民は、軍事評議会に対する勇敢な不服従のキャンペーンを行っている。

彼らには軍の攻撃を押し戻す可能性がある。しかしそのためには、アル・ブルハンとヘメディを支持する国々に大きな外交圧力をかける必要がある。さらに政府を迂回する違法な収入源を摘発する国際的な調査・行動に記入に注力すべきであろう。

## いま緊急に必要なこと

手遅れになる前に行なっておくべきアクションがある。。

軍隊とイスラム主義者とは生来の仲間ではない。しかし何年もの間、軍は過激派の活動を見て見ぬ振りをしてきた。そのことから利益を得てきた。

湾岸諸国およびそれ以遠の諸国には強力なイスラム過激派組織がある。

スーダンのイスラム過激派がそれらのスポンサーと組んで、危険な権力闘争にいとむ可能性はこれまでになく高まっている。政府軍に対抗できるだけの強力な武装が実現すれば、それは「ソマリア型内戦」を招くことになるだろう。

スーダンの民間人、ティグレからの難民、そしてサヘル(サハラ砂漠の南部)一帯の民衆にも影響を与えるだろう。そうなれば、ヨーロッパの国境地帯にふたたびアフリカからの難民があふれかえることになるだろう。

最近のスーダン危機から何かを学ぶとしたら、国造りというのがいかに困難な課題であるという認識だが、それに代わる案はさらに悪質なものとなる可能性があるということだ。

その悪夢は急速にスーダンに近づいている。問題は、手遅れになる前に、国際社会がそれを防止することができるかどうかにかかっている。

.....  
.....

「大変だ、大変だ！」と八五郎のように叫んでいるが、「大変」な中身が、「ヨーロッパにまたアフリカ人難民が押し寄せるぞ！」というのでは、いささか鼻白む思いだ。

とはいえ、現地の力関係やイスラム過激派との関係など、他で得られない貴重な情報が詰まっている。

いちばん納得したのは、タイやミャンマーなど軍事独裁の裏側はどこも瓜二つの構造だということだ。

ラテンアメリカでは民衆の勢いが強いことから、与野党が立場を変えているが、かつてのタクシン親子、アウンサン・スーチらのことを思い出せば、基本的な政治構造は変わっていないことがわかる。

基盤にある問題は、コロナ・ワクチン接種率 5%という、21 世紀の「暗黒大陸」の現実だ。ネグレクトにせよ内政干渉にせよ、そこに先進国の影を見ることはきわめて容易だ。